



ケント

井口昭久

私は三十代の半ば、ニューヨークの医科大学で研究をしていた。その頃は煙草を吸っていた。暮らし始めた頃、私の英語はアメリカの庶民には通用しなかった。

駅の売店で「マールボロー」と、舌を口の中で精一杯後ろにそらせて発音しても、煙草を求めていることが伝わらなかった。ラークラート、マールボローなどと煙草は、^{アール}マイルの^ふ入った名前が多い。Kentを買うことにした。ケントはrもiも入っていない。その当時、私だけではなく日本人はケントばかり吸っていた。

郊外電車でニューヨークに通っていた。

私は中国人と思われることが多かった。中国人に中国語で呼びとめられて道を聞かれたこともあった。

大学の食堂にフライドチキンがあった。チキンと言うと食堂の太ったおじさんが、「プレスト or レッグ?」と聞いてきた。胸か足かどっちなんだ、と聞いている。プレストが胸で、レッグが足であることは知っていた。「プレスト」というと足が、「レッグ」と答えると胸が出てきた。だから私は「プレスト」と答えて足を食べていた。

中国人のコズマさんと昼食を食べることが多かった。教授から紹介された唯一のアジア人であった。コズマさんもニューヨークに来て日が浅かった。アメリカに渡って暮らし始めたアジアの二人は心細かった。お互いに通じにくい英語であった。硬い表情で向き合っていたが、何となく親近感があった。しかし会話に余裕がないので、空白の時間をもてました。

「to New York」と言ったつもりだが、「tow New York」と駅員に聞こえたらしく、切符が2枚出てきた。

「for New York」というと4枚も出てきた。英語の発音は最初に刷りこまれてしまうと修正が困難になる。最初に英語を教わったのは信州の田舎の中学校であった。教師から、「イット、イズ、ワ、ペン」という英語とは似ても似つかぬ発音をカタカナで教わった。仕込まれた発音のメカニズムは私の脳に頑固に固定されてしまった。

ニューヨークは人種のもつぽである。日本人と中国人と韓国人を区別するのは難しい。

その日の昼食で彼は、ご飯にバターをのせ、その上から醤油をかけた物をスプーンで食べていた。私はプレストと言って注文した足であった。コズマさんが言った。「もし are you Japanese?」。そう言えばこの人は「if」を「もし」と言うことが

前にもあった、と気がついたとき、私は分かった。「もしかして、——」と言った時、小島先生の顔がゆるくなった。小島先生は、流暢な日本語で話し始めた。「私は京都大学からきています。先生は中国人だとばかり思っておりまして失礼しました」。

小島先生も田舎の中学校で初めての英語を教わったと言っていた。



井口昭久 1943年長野県生まれ。名古屋大学医学部卒業後、同第三内科入局。愛知医科大学講師などを経て'78年ニューヨーク医科大学留学。'93年名古屋大学医学部老年科教授。名古屋大学医学部附属病院長を経て現在、愛知淑徳大学教授、名古屋大学名誉教授。『鈍行列車に乗って—医者人生ソロソロ帰り道』(風媒社)など著書多数。